

遍昭と小町とは、こうして別れた。

打てば響く遍昭と小町の応答は、二人にとって、何事にも

もかえがたい楽しい限りのものであった。

*

次の日の朝のことであつたらうか。

「こんなにも親しく言葉を交わした間柄になつたのです

もの、……もう一度お会いして、お話をしたいわ」

小町はそう思い、遍昭を訪ねていった。

しかし、どうしたのだろうか。遍昭はもはや、か

き消えたように失せてしまつていた。(「遍昭集」参照)

遍昭はこの頃、比叡山に登るための準備にあわただしい

日々を過ごしていたのであろう。

↑先に述べたように、遍昭は、斉衡二年(八五五)五月、

従兄弟にあたる右大臣藤原良房の配慮によつて、叡山に登つ

たのだった。(慈覚大師伝)

そして遍昭は、後にはついに僧正にまでなつたという。

(「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、二七―三〇頁参照)

小野貞樹

文徳天皇(仁明天皇の第一皇子。八二七―八五八。在位八

五〇―八五八)の政治は、母(仁明天皇后順子)の兄

5445 F 9行

5.450 P

藤原良房を中心にすすめられた。(「日本史辞典」東京創元

社「文徳天皇」。「皇室天百科」朝日通信社、二二〇―二頁仁

明天皇「文徳天皇」参照)

藤原良房は、文徳天皇の即位後、外戚として権を得、右

大臣・左大臣をへて天安元年(八五七)太政大臣に進んだ。

(「人名大事典」谷山茂、むさし書房「藤原良房」。他参照)

文徳天皇が天安二年(八五八)八月に三十二歳で崩御さ

れると、――藤原良房の娘明子が八五〇年に生んだ文徳天

皇の第四皇子、惟仁親王が、九歳で皇位を継承された。清

和天皇(八五〇―八八〇。在位八五八―八七六(天安二)貞

観一八)である。(「日本史辞典」東京創元社「文徳天皇」

「清和天皇」藤原良房。「広辞苑」清和天皇「参照)

ここに、藤原良房は、清和天皇の摂政となつた。臣下と

して、最初に摂政の地位についたのだった。

その後、藤原良房は、貞観八年(八六六)の応天門の変

に際し巧みにこの変を利用して大伴(伴)・紀の両氏を政

界から追い、藤原氏の摂関政治の基礎を確立する。(「人名

大事典」谷山茂、むさし書房「藤原良房」参照)

尚、『応天門の変』の概要について、予め述べておくこ

とにしよう。

「貞観八年(八六六)春、閏三月十日の夜、朝堂院の正門

藤原良房 順子 下巻

である『応天門』が燃え上がり、西そでの樓鳳楼、翔鸞楼、大納言伴善男は、左大臣源信に容疑をかけ、その屋敷に逮捕の兵をさし向けようとした。

大政大臣藤原良房は、すぐに参内し、清和天皇にこの事件への対処方を問い合わせたが、天皇の関知しないことだ

という返事だったので、さっそく逮捕をやめさせた。そして半年後の九月二十一日、判決が下った。伴善男らの放火とされ、伴(天伴)、紀両氏あわせて八人が遠流と

なった。その中には、善政をした国司として名高い肥後守紀夏井(播磨介・讃岐守・肥後守を歴任)もいた。

肥後守紀夏井が土佐国へひかれて行く道の両側にならんだ人民は、声をあげて泣いた。伴善男は、伊豆に流されることとなり、護衛兵に囲まれ

て都を後にした。二人とも、その後の消息については伝えられていない」という。(日本の歴史③)平安貴族、読売新聞社、七一〜七

四頁。「日本史辞典」東京創元社(応天門の変)参照) ①平安時代の朝堂院の正門『応天門』は、周初の頃の宮室

■ところで、

*

5.451P

■貞観元年(八五九)十二月二十一日条。

「正五位下行肥後守藤原朝臣冬緒」爲「右中弁」

してみよう。

ではここに、『三代実録』から、「肥後守」の記事を抜粋

○正月十六日(と)であった。(三代実録) 天皇の貞観八年(八六六)の六年前、——貞観二年(八六

小野貞樹が肥後守となったのは、応天門が炎上した清和

*

実録「清和天皇の貞観十三年十月二十一日条参照)

と思われる。(第十八章〈応天門〉の項において既述。「三代

朝堂院の正門を、『応天門』と呼んだのだろう」

成周(洛陽)の移り変わりを知悉していて、……平安宮の

〈平安時代の最高権力者達は、周初頃から以降の洛邑。

■あえて述べると、

と想像される。

第14図参照)

楼・翔鸞楼)が立てられていたのではなからうか。(四巻の

から後の様式にならって、『闕』すなわち『楼観』(樓鳳

②また、朝堂院の正門『応天門』の西そでには、周代後半

第5図・第6図参照)

の正門『応門』に由来しているのかも知れない。(四巻の

109

新ヤ(1) 84頁
85頁

新ヤ(1)-100頁
母古朝の山登田宮

180上E解説

尚、二十五年後の光孝天皇の元慶八年(八四)三月九

日条に、「大納言正三位藤原朝臣冬緒たんのふゆむね爲な兼な彈は正伊しんい」

という任官記事があり、元慶八年当時、藤原朝臣冬緒は生

存していた、ということが分かる。

■貞観二年(八六〇)正月十六日条。

「従五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹おののただき爲な肥後守ひごしゆ」

■貞観二年十一月二十七日条。

「従五位上行大宰少貳藤原朝臣眞數ふじのまか爲な肥後守ひごしゆ」

尚、十年後の貞観十二年(八七〇)二月十四日条に、

「散位従五位上藤原朝臣眞數ふじのまか爲な刑部大輔けいぶたふ」

とあり、藤原朝臣眞數は十年後も健在だったことが分かる。

■貞観七年(八六五)正月二十七日条。

「散位従五位上紀朝臣夏井あつゐ爲な肥後守ひごしゆ」

■貞観八年(八六六)九月二十一日条。

「従五位上行肥後守紀朝臣夏井あつゐ配なづ土左國とさくわに。……昨きのう年とし母石川氏聞いしがわうぢのきこ而して哭なみ之を。人ひと問と其の故ゆゑ。答こたへ曰いわ。吾聞われきこ。肥後風俗。國宰至清。身必みづか不た全く。吾子其不われこゝろ終乎つひ。……遂つひ託たく身み大納言伴宿祢おののたまき善男ぜんなん。應天門火。云々」(後述)

■貞観八年(八六六)十一月二十九日条。

110

5398表

「従五位上行大宰少貳在原朝臣安貞あんのやすちか爲な肥後守ひごしゆ」すなわち、小野貞樹が肥後守であったのは、貞観二年

(八六〇)春正月十六日から、同年の冬十一月二十七日以前迄の、……極めて短い、一年足らずの期間だったことが

分かる。

そして、肥後守となった小野貞樹の前途には、暗雲が待ち受けていたようだ、——このことについては、追って述べたい。

因みに述べると、肥後国には、『木葉山』(別名、靈雨山)

という麗美な山(三八三頁)がある。(四巻の第12図参照)

合志の七国神社から見て西方約九キに聳える木葉山の麓

には、約一三〇〇年前に造営されたという春日神社があり、

山頂には靈雨山神社がある。(帝國地名辞典「太田爲三郎、

名著出版〈木葉山〉。「熊本の伝説」荒木精之、角川書店、七一

頁。「熊本の山」今江正知、熊本日日新聞社、二四頁〈木葉山。五万分の一地図参照)

木葉山は菊池盆地の入口にひとときわ高く峙たつ山だから……

古来菊池を本拠地としてきた中臣氏が、この山を崇拝して、

春日神社および靈雨山神社を創建したのではなからうか。

なお、『新・やまと物語』の本文中において詳述するよ

111

5.452P

新・巻96

鎌倉系水

うに
「菊池盆地を中心とする一帯が、そもそもの中臣氏の本拠地だったのだろう」
と想到される。(枚岡神社・春日神社あたりの地勢、他参照)

さて、たぶん清和天皇の貞観二年(八六〇)秋のことだっ
たのであろう。
*
その時、小町は二十歳であったろうか。
新たな任地肥後国で苦勞の絶えない慌しい日々を過ごし
ている貞樹のもとから、京の小町へ文が届いた。

それは、走り書きの便りだった。
その文面を見た小町は、…すこしばかりすねてみせて、
こう歌った。

今とはとわが身時雨にふりぬれば
言の葉さへに移ろひにけり
返し
人を思ふ心の木の葉にあらばこそ
風のまにまに散りも乱れぬ

私はもう秋(厭)の時雨(通り雨)にかすんだように、
あなたの記憶のなかでは古びてしまったのでしよう。お心
が冷たくなつたうえに、お言葉までが秋の木の葉同様に変

5,453 P

わり果ててしまったのですね。

とんでもない誤解です。あなたを思っている私の心が、
かりに木の葉であったならば、風に吹かれて散り乱れもし
ましようが、私の心は木の葉と違って決して散ったり乱れ
たりせずただただあなたを恋しく思っているのです。

この贈答歌は『古今集』巻第十五、恋歌五に収められて
いるものである。

なお、貞樹の返歌の「こそ」の結びは末句の「め」であ
り、「あらばこそ」の仮定法の裏に「木の葉でないから散
り乱れない」(あり得ない)の意が隠されている。(古今和
歌集「日本古典文学全集、小学館、三〇二頁の注。「広辞苑」

〈あらばこそ〉。他参照)
なるほど、小町の歌には、「わが身時雨にふりぬれば」
とある。

しかし、だからといって言葉通りに、「小町がかなりの
年になつた時の歌だ」と解す必要はあるまい。

恐らく、
「肥後国に赴任した小野貞樹からのたよりは、何故かしら
途だえがちなのに、…ひさしぶりに届いた文は粗雑で、
誠意がこもっておらず、時ばかりが移つてゆく」とい

つたほどの意味なのであろう。

5.454¹

つまり、貞観二年（八六〇）、小町が二十歳であった年
の秋に、——小町は、貞樹の心の内を確かめようとして、
この歌を詠み送ったのだらう、と推察される。

■その当時、小野貞樹が何歳であったのか知る由もないが、
肥後守小野朝臣貞樹は遙かに遠い九州の肥後国にあって、……
都にいる小野小町のことを、深く愛しつづけていたように
思われる。

そしてまた、小町の方も、
貞樹は貞樹を憎からず想って
いたのであろう。

小町の歌には、恋の心がある。好きでもない男に、この
ような歌を作って贈るといふことはあるまい。

好きだからこそ、小町は、
「言の葉さへに移ろひにけり」
と嘆いているように感じられる。

■なお、群書類従本『小町集』には、
忘れぬるなめりとみえし人に
今はとて我身しくれと降ぬれば
ことの葉さへにうつろひにけり
かへし

人を思ふ心この葉にあらはこそ
風のまにまに散りも紛はめ

と記されている。

■また、参考迄に述べると、『伊勢物語』二二一段には、

むかしありける色好みける女、あきがたになる（自分
に厭気がさして来た）男のもとに
今はとてわれに時雨のふりゆけば
言の葉さへぞうつろひにける

返し、紀定文（伝記未詳。小式部内侍本に「きのさねふ
んじ

人を思ふ心のはなにあらはこそ
風のまにまに散りもみだれめ

とある。（竹取物語・伊勢物語・大和物語「日本古典文学大
系、岩波書店、一八三頁参照）

＊
それにしてもどうしたことが、
樹の記録は見当たらない。（「小野小町」前田善子、三省堂、一
六九頁参照）

＊
或いは、あまりにも清廉で妥協を知らない小野貞樹は、
肥後国の在来保守勢力の反発を招いて、殺されたのかも知
れない。

紀實元(室の544) (868頃~945頃)

そしてそれは察するところ、……貞観二年(八六〇)冬

十一月二十七日(後任の藤原朝臣眞敷が肥後守となつた日)

以前のことであつたらう、と思われる。

• というのは、『三代実録』貞観八年(八六六)九月

二十二日条に、先述の通りこう記されているからである。

「肥後守紀朝臣夏井配^ニ土左國^ニ。……〔昨年の〕貞観七

年拜^ス肥後守^ヲ。母石川氏聞^テ而^テ哭^ク之^ヲ。人問^フ其^ノ故^ヲ。

答^テ曰^ク。吾聞^ク。肥後風俗。國宰至清。身必^ズ不^レ全。吾

子其不^レ終^ル乎^ク」

• つまり、貞観七年(八六五)正月、紀夏井が肥後守に

任命された時、夏井の母は慟哭し、

「聞くところによると、肥後の風俗上、国司が清廉である

と必ず身を全う出来ないそうです。吾が子もきつと終りを

全うすることはないでしょう」

と嘆いたという。

• 「身必不^レ全^ク」とは、……「致命傷を負つた」という意

味なのであろう。

• 即ち、紀夏井の母のこの言い方から推し量ると、

〈これ以前の肥後の国司の幾人かが、清廉でありすぎた

ためにその身を全う出来なかつた〉

ように理解される。

5.455P

113

• もっとも、紀夏井の前任者「藤原眞敷」は、この後の貞

観十二年(八七〇)二月十四日に刑部大輔に任命されてい

るのだから、……前任者「小野貞樹」以前の数名が、清

廉で死に至つたと解される。

• 紀夏井が肥後守に任命された貞観七年(八六五)正月二

十七日のほんの数年前の清廉潔白な何人かの肥後守(五年

前の貞観二年(八六〇)正月十六日に肥後守に着任した小野貞

樹ら幾名かの者連が、悲惨にもその身を全う出来ず、……

あまりにも記憶になまなましかつたからこそ、紀夏井の母

は我が子の不幸を予感して哭いたものと思われる。

• 他の国々とは違つて肥後国には、中央政権をも意に介さ

ない独自の気風が受け継がれていたのではなからうか。

• 天地開闢以来の長い長い歴史をもつ肥後国だからこそ、

時の朝廷さえもいくぶん遠慮があつて、力でもって押えつ

けること~~が~~出来な~~い~~面があつたのかも知れない。

*

■ それでは、『肥後守小野貞樹』とはどんな氏素姓の人だつ

たのだらうか。

• 小野小町と同姓であるところから、親類であるうとする

説が契沖(江戸前期の国学者・歌人)によつて提唱されて

いる。

けれども、小野氏の系図に貞樹の名は見えず、特に根拠

はないようである。

一方、『勅撰作者部類』は、小野貞樹について、「石見王

の御子」という。

しかし、『皇胤紹運録』・『大系図』の高階氏の系図石見

王の所には、

天武天皇―高市親王―長屋王―桑田王―磯部王―石見王―

丹波山城守神祇伯

〔**峯**緒

緒 從四上右中弁

承和十賜 高障真人姓 一

と記されているだけであり、また石見王の御子の條にも其

の名は見当たらない。

とはいえ、もしこれが脱漏であるとするならば、貞樹は

峯緒の弟に当ることとなり、年代としてもほぼ一致する。

あるいは、仁明天皇の承和十一年(八四四)、兄峯緒は

高階氏を賜り、弟貞樹は小野氏を賜った、のかも知れない。

そしてもしもそうなら、小野貞樹と小野小町とは、同族

でないことになる。(「小野小町」前田善子、三省堂、一六八

頁一七二頁参照)

■小野貞樹の経歴は、諸書によると、次の通りである。

天齋嘉祥二年(八四九)閏十二月九日

「任 二東宮少進 一」(古今和歌集目錄)

5.456

由500/1と同時
1字Fが3

天齋嘉祥三年(八五〇)四月十七日〔文徳天皇即位の日〕

「小野朝臣貞樹從五位下」(文徳実録)

嘉祥三年(八五〇)八月五日

「從五位下小野朝臣貞樹爲 二刑部少輔 一」(文徳実録)

仁寿三年(八五三)十月十六日

「小野朝臣貞樹爲 二甲斐守 一」(文徳実録)

『古今集』卷第十八雑歌に、この頃の歌一首がある。

齊衡二年(八五五)正月七日

「小野朝臣貞樹從五位上」(文徳実録)

天齋貞観二年(八六〇)正月十六日

「從五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹爲 二肥後守 一」

(三代実録)

つまり、小野貞樹は、仁寿三年(八五三)十月十六日に

甲斐守となり、…七年後の貞観二年(八六〇)正月十六

日に肥後守となったのだった。(「小野小町」前田善子、三省

堂、一六九―一七〇頁。「古今集」第十八一九三七―小野貞樹

の歌)参照)

*

肥後守としての任務を全うしようとする小野貞樹は、肥

後国の保守勢力との激しい抗争に明け暮れる心労の日々を送

っていたとであつたらうか。

のてはなかりうか

860 20キ
841 1 19

人にもない心の持ち
54535 今Aとて、小町身1<small>小町</small>

そんなわけで小野貞樹は、愛する小町に宛てて、気のきいた便りさえなかなかな書けなかったのだろう。

そして幾通もの小町からの手紙に対して、返事も出来な

い辛い毎日が更に続いていったように思われる。だが、心安まることの無い緊張した時を割いて、貞樹は

ようやく一通の文をしたため、都にいる小町のもとへ送り届けた。

しかしながら、貞樹が切迫した状況の真只中に居ることなど知る筈もない小町は、——その文のあまりのそっけな

さに、心を痛めた。私のいとしい貞樹様は、どうなさったのかしら

ここに小町は、歌を作って、貞樹の心を確かめてみずに

おれなかった。〈私(小町)に厭きておしまいになったのでしようか〉

小町の問いかけの歌に、貞樹は慌てた。〈いいえ、とんでもありません。私はただただあなたを

恋する人が、遠い故郷『肥後国』で無残にも殺された、——という知らせを聞いた小町の驚きの大きさは、いかば

5,457

115

かりであっただろうか。

そして又、全ての経緯を知った時の小町の悲しみは、ど

んなであっただろうか。

「貞樹様は、肥後国で大変な御苦労をなさっておられたの

だわ。そうした事を露ほども知らなかったとはいえ、……

あの時私は、何という心ない歌をお送りしたのでしよう」

小町は、自分のことをこよなく愛しながら帰らぬ人となっ

てしまった貞樹を慕い、胸ふるわせて泣き崩れた。

「貞樹様。私の貞樹さま」

目を泣き腫しながら、小町は、茫然自失の日々を過ごす

のだった。

こうして、数年の時が、瞬く間に過ぎ去っていった。

文屋康秀

平安時代初期の六歌仙の一人である『文屋康秀』について述べる

(1)『中古歌仙三十六人伝』によれば、「先祖不見」

(2)『勅撰作者部類』によれば、「縫殿助宇千の男」

とあり、文屋康秀は一生地下(清涼殿に昇殿を許されない官

人)で終った人のようである。

●『古今和歌集目録』を基にして、その略歴を見ると、

二行
上
三行
の
の

任^二刑部中判事^一 任^二三月廿日 任^二貞観二年(八六〇)

任^二山城大掾^一 任^二正月十五日 任^二元慶元年(八七七)

任^二五月廿八日 任^二元慶三年(八七九)

とあるだけで、文屋康秀が三河掾になつた年月も不明であり、年齢も亦知る術がない。

●唯一つの手懸りとして、『古今集』巻第一、春歌上、八に

一條の后の春宮の御息所ときこえける時、正月三日

お前(御前)に召して仰言ある間に、日は照りなが

ら雪の頭に降りかかりけるを詠ませ給ひける

春の日の光にあたるわれなれど

かしらの雪となるぞわびしき

という歌がある。

これとても確かな年齢は推定し難いのであるが、二條の

后を東宮の御息所(皇太子妃)と申し上げていた時代は、

貞観十一年(八六九)陽成天皇が立太子されてから元慶元

年(八七七)即位される迄の八年間の間にあり、御前に

てこの歌を詠み御感あつて幾許もなく山城の大掾の官につ

いたものと推定すると、この歌は、貞観十八年(八七

六)頃の春に詠まれたものではないかと思われる。

5.4587

116

歌詞の中に「頭の雪」という語があることによつて、も

はや、餘程の老齢と見ねばなるまい。

本居内遠(江戸後期の国学者)は、この時(貞観十八年)、

文屋康秀六十歳と見ている。

そして前田善子氏は、本居内遠のこの仮説にのつて、

「文屋康秀が三河掾に任官されたのは、貞観五年(八六三)、

四十七歳の頃のことであつたらう」

と推定している。(「小野小町」前田善子、三省堂、一九二

三頁。「小野小町致」小林茂美、桜楓社、二〇八頁参照)

この説によれば、

〈文屋康秀が三河掾であつたのは、貞観五年(八六三)頃

から以降、——元慶元年(八七七)正月十五日(山城大掾

任官)迄の間だつた〉

ということになる。

■なお、『掾』は、我が国古官制において、地方の第三等

官をいう。(「大字典」上田万年、講談社〈掾〉。第九十五章

〈良実と小町との出会い〉の項。第6表参照)

■また、文屋康秀は、『古今集』巻五二四九、および

『小倉百人一首』の、

吹くからに秋の草木のしをるれば

むづ山風を嵐といふらむ

空木
上
二行

111

の歌で知られている。

■**ともあれ**『文屋康秀』についてはあまりにも不明な点が多い**類例**の

●貞観五年（八六三）、文屋康秀は四十七歳の時に三河掾

となった、

●同年、小野小町は二十三歳であった、

と仮定してみたい。

*

さて文屋康秀は、三河掾となった頃のある時、——小野

小町に文を送った。

貞観二年（八六〇）の秋（もしくは初冬）に小野貞樹が

死んで、それからというものの失意のどん底に打ちひしがれ

ている小野小町を哀れに思い、慰める**為**に……文屋康秀

は手紙を送ったのだろうか。

『古今集』巻第十八八九三八に、こう記されている。

文屋康秀が三河掾になりて「県見にはいいでたじや」

（私の任国をご視察においでになりませんか）と言ひやれり

ける返事によめる

小野小町

わびぬれば身をうき草の根を絶えて

誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

5.459^p

この歌は一見、

「私は悲観して心細く暮らしているのだから、身を憂く思

い（つらく思い）、——根なしの浮草が水の流れに誘われ

ていくように、どこへなりと参りましょう」

という、快諾の意にきこえてくる。

しかし、「あらば」の仮定法を、見のがしてはならない。

「あらば」の仮定法は、「ない」という断定の婉曲表現で

ある。

すなわち、文屋康秀の誘いの言葉を、小町は表向きやん

わりと、だかきっぱりと、

「誘う水があつたら行きましようが、貴方なんかのところ

にはまいりません」

と断わったのである。

また、結句の「往なむ」には、〈拒否する〉意味の「否

（辞）む」が効かせてあるのかも知れない。そのように解

したくもなるほどに、「誘う人があなたでは嫌だ」という

拒絶を、ねばねばと、どっちともとれるような表現で返し

たのだった。（小野小町致「小林茂美、桜楓社、二〇三〜五

頁。「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、三五二頁の注

解参照）

*

ところで察するところ、三河掾文屋康秀に「私の任国をご観察においでになりませんか」と……「あはれ」をかけられた小野小町の心は、いよいよ

はじめになっていったように思われる。

小町は、歌った。

『古今集』には、先の歌（わびぬれば身をうき草の根を絶えての歌）に引き続いて、——小町の次の歌が載せられている。

題しらず

あはれてふ言こそうたて

世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ

人がかけてくれる「あはれ」という言葉こそ『うたて』

（いやなこと）であり、「層心を沈ませるものであって、世の中（の悲しい思い出）を思い離れさせない『ほだし』

（手かせ足かせのような、自由を束縛するもの）だったのです

ね。

なお、「けれ」は、そのことに初めて気づいて詠嘆する

意である。（『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、三五

三頁の注解。「広辞苑」へうたてく〈ほだし〉参照）

人はすぐに、「不憫だ」といつて哀れがる。

しかし、他人に「あはれ」をかけられた小町は、

5,460^P

あはれ

れをかけられて初めて感じたことながら……『いやなこと

だ』と思ったのであろう。

心の内の大切な思い出として、そっとしまっておきたい

のに、「あはれ」と言っ、おやみやたらに引つ掻きまわ

されるものだから、世の中の忘れていた思い出がまたよ

みがえってくる。

「あはれ」という言葉こそ、厭わしい『うたて』（いやな

こと）であり、世の中を思い離れさせない『ほだし』（人

の身を束縛する枷具）だったのですね、といった意味であ

るうか。

小町は、「貞樹のことを忘れよう」と務めていた、と推

四のみこ

それでは、ここにもう一度、小野小町から文屋康秀への

『返事』の歌を見てみよう。

わびぬれば身をうき草の根を絶えて

誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

この歌には、……新たな恋を思わせる、かすかな響きが

あるように感じられる。

文屋康秀ではない誰かに、——この時すでに、小町は淡

い恋心を抱いていたのではなからうか。

つまり、
〈その方がお誘いになる水にならば、喜んで流れて行きた
いのに、……〉

と歌っているように思われる。

そもそも、文屋康秀という〈誘い水〉を前におきながら、

「もしも誘う水があったら」というのは、ひびすぎること

なのである。「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、一〇四頁参

照)

なるほど、文屋康秀には気の毒な歌だが、——しかしこ

のとき小町は、胸の内に揺らめくほのかな恋心と、思うに

まかせないわびしさとを、歌い込まずにおれなかったのか

も知れない。

〈あのお方が誘って下さったのならば、どこへなりとも往

きたいのだけれど、……誘ってくれたのは、思いを寄せて

いる方と違うのですもの、否むしかないわ〉

といった意味をも込めて歌ったように察せられる。

*

とすれば、小町の意中の人とは、一体誰だったのだろう

か。

『古今集』巻第十三、恋歌三、六五六には、次の小町の歌

5.461P

がある。

うつつにはさきもこそあらめ

夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ

そして、この歌を収めている群書類従本『小町集』には、

「やむことなき人の忍ひ給に」

という詞書が添えられている。

あるいは、小町の恋の相手は、おそれ多くも、やんごと

なき尊貴な方であったのかも知れない。

そのため、おいそれとは逢うことすらもなかなかできな

かったのであろう。

そんなもどかしいある日……やんごとなきその

お方が、忍んでおいでになった。

小町は、心がふるえるばかりに嬉しかった。

「昼の間は人目を忍んでおいでになれないこともございま

しょう。ところがつれなくもあなた様は、夜の夢にさえも

現われては下さらないのです。夢路においても、人の目を

気にしていらっしやると思つて、私は悲しくてなりません

でした。……それなのに何と今日は、夢などではなくて現

実に、貴方様がお見えくださって、夢かと思えばかりに嬉

しゅうございます」(『古今和歌集』日本古典文学全集、小学

館、二六六頁の注解参照)

119

小町は、その気持を歌にしたのかも知れない。

やんごとなきそのお方との話もはずんで、小町は幸せの

極みにあった。

*

この歌を詠んでからの小町は、以前にもまして、そのお

方のおいでを心もそぞろに待ち焦れた。

「こんどは、いつお見えくださるかしら」

それにしても小町の歌に、

《夢をうたい込んだものが多い》

ことは、人々の注目するところである。(以下、「古今集」

及び「宮廷を彩る才女」晁教育図書(七九頁参照)

(552) 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ

夢と知りせば覚めざらましを

(553) うたた寝に恋しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

恋しい人のことを夢にみた小町の醒めて後の心残り、ま

た夢に見たいという望みが、切なげに歌われている。

(554) いとせめて恋しきときは

うばたまの夜の衣を返してぞ着る

恋しくてどうにもならない時、私は夜の衣を裏返しに着

て寝るのです。(「うばたまの」は、夜・黒などの枕詞)

5.462^P

けれども恋する人をただじっと待っているのは、つらく

悲しいことである。せめて夢の中だけでも、自分の方から

逢いに行きたい、と小町は歌う。

(557) 限りなき思ひのままに夜もこむ

夢路をさへに人はとがめじ

あなたを恋い慕う無限の思いを案内の燈火として、せめ

て暗い夜にでも訪ねてまいりましょう。夢路を通っていく

ことまでは、誰もとがめだて恋しないでしようから。

夢の中での逢瀬は楽しい。

しかし、それでもやはり、

《一目お逢いすることの方がいい》

との思いはつる。

(558) 夢路には足もやすめず通へども

うつつに一目見しごとはあらず

夢の中では、足の疲れも厭わずせつせと通いつづけて、

いつも楽しいひとときを過ごしておりますが、…でもよ

く考えてみますと、現実にはちよつと一目だけお逢いするこ

とほども楽しいものではございません。一目だけでも、夢

でなくお逢いしようございます。

こうして、やんごとなき人とのまたの逢瀬を待ちわびる

焦れったくも心楽しい年月が、夢のように打ち過ぎていっ

た。

ところが、小町の心の大きな存在になっていたと思
 われるその方が、——とある年の『秋』に、お亡くなり
 になつてしまつたようである。
 群書類従本『小町集』の五六番歌として、こう記されて
 いる。

四のみこのうせ給へる(早期)つとめて風ふくに

今朝よりは悲しき宮の秋風や

又あふこともあらしとおもへは

なお、「つとめて」は「早期」のことである。例えば、

『枕草子』の冒頭に「冬はつとめて」とあり、よく知られ

ている。

もつとも、江戸前期正保三年（一六四六）版の流布本系

『小町集』（歌仙家集本）には、

四のみこのうせたまへるつとめて、風吹くに

今朝よりはかなしの宮の山風や

またあふ坂もあらしと思へは

とある。

また、神宮文庫本『小町集』（二五番歌）では、詞書が

「四のみこのうせ給へる比、風のふきしに」とあり、初句

5.463P

が「けふよりは」、三句が「吹風や」とある。

とはいえ徒来から、——一・三・四句を、

「悲しき宮の 秋風や 又あふことも」

とする群書類従本『小町集』の本文に従つて、

《秋風の吹くころに没した「四のみこ」への挽歌》

という受けとめ方がなされてきた。（「小野小町致」小林茂

美、桜楓社、三七六、三九三頁参照）

*

ではここに、あくまでも実証のない推定ながら、

「やんごとなき人」及び「四のみこ」について、~~検討~~考え

てみることにしたい。以下、「小野小町」前田善子、三省堂

一九八二〇二頁参照）

この「やんごとなき人」こそ、小町が最も心を傾け盡く

して愛し奉つた御方であろう、と小町の歌から推察される。

そしてまた、「やんごとなき人」とは、すなわち「四の

みこ」のことなのであろう、と思われる。

だが、「四のみこ」がいづれの御方を指し奉っているか、

ということになると、論及する手がかりは見あたらない。

い。

そこで、小町の時代に於て「四のみこ」又は「四の宮」

と称されていた可能性のある御方々を挙げてみることにし

よう。

■嵯峨天皇第四皇子『基良親王』

(1)天長七年(八三〇)十一月三十日。

「基良親王ミキヨノミコ加カ元服ゲンボク」(日本紀略・日本後

紀)

(2)天長八年(八三一)六月十四日。

「元品基良親王ゲンヒンミキヨノミコ太上天皇(嵯峨)之皇子也」(日本後

紀)

■淳和天皇第四皇子『基貞親王』

(1)天長六年(八二九)七月十日。

「皇后ミコ誕生皇子ミコ」(日本紀略・日本後紀)

(2)貞觀十一年(八六九)九月廿一日。

「元品基貞親王ゲンヒンミキサダノミコ帝不視事三日。不任レ緣葬諸司エンサウシヨウジ」

以テ固辭コトワサ也。親王者。淳和太上天皇之第四子也。母嵯

峨太上天皇皇女譚正子。淳和天皇納メ之ヲ。生ム三皇子ミサミコ。

立テ爲ル皇后ミコ。親王神姿清秀。誠孝懇至。承和十一年

(八四四)授ケル三品ミツノミ。尋テ拜シ上総太守カミノソウノミ。後病危篤。上

表シテ請フ入道ニ。許サセ之ヲ。因テ而シテ剃頭カミヲ。受ケ大乘戒ニ。

發シテ病ヲ而シテ薨ス(三代実録)

■仁明天皇第四皇子『人康親王』

(1)承和十二年(八四五)二月十六日。

5.464P

「天皇喚メ時康トキキミ(仁明天皇の第三皇子、後の光孝天皇)・人

康キミ(光孝同母弟)親王等ミコトノミコトノミコト於清涼殿ニ令シ加シ元服ヲ(続日

史料によらず
245 F 3頁
24 24 111c
7 c 63

本後紀)

(2)貞觀十四年(八七二)五月五日。

「元品人康親王ゲンヒンニカノミコ」(三代実録)

(3)『皇胤紹運録』には、「四品・彈正尹ニ・法名法性ニ・號ニ

山科宮ニ。又北野親王トとある。

(4)さらに詳しく述べると、次の通りである。(以下、「小野

小野攷コノノキ」小林茂美、桜楓社、四〇九頁参照)

●仁明天皇の第四皇子人康親王は、承和十五年(八四八)

四品に叙され、嘉祥三年(八五〇)に上総太守、仁寿二年

(八五二)に彈正尹、齊衡四年(八五七)に常陸太守を兼ね

たが、貞觀元年(八五九)二月から高熱におかされて、気

息絶えるほどの状態となり、親王・官爵を辞したい旨を上

表し、許されて同年五月七日出家入道している。『三代実

録』によると、少年の時より大乘道に帰依する意志をもつ

ていたが、今、病と謝して遂に本懐をとげたとある。(貞

觀元年五月七日の条)

●『一代要記』に「貞觀十四年(八七二)五月五日薨ス、

年四十二」とあるから、逆算すると、人康親王が生ま

れたのは天長八年(八三一)、出家したのは貞觀元年(八五

872 42
831 41
189

122

時康親王(後の光孝天皇)と「良山宗貞(後の僧正遍昭)との深い絆」の項

九月五日、二十九歳の時であったことになる。

*仁明天皇の第三皇子時康親王(後の光孝天皇)は天長八年(八三二)に出生されたという。

その同じ年(八三二)に、人康親王は同母弟として誕生されたのである。

以上の御三方である。

しかし、嵯峨天皇第四皇子『基良親王』は、天長八年(八三二)夏六月十四日に早くも薨去されたので、問題に

照) 小町が承和八年(八四二)に生まれたとすれば、基良親王は小町が生まれる前にお亡くなりになっておられたこと

となる。

仁明天皇第四皇子『人康親王』が、貞観元年(八五九)夏五月七日に出家された時、人康親王は二十九歳、小

町は十九歳であったように思われる。

また、人康親王が、貞観十四年(八七二)夏五月五日に薨去された時、人康親王は四十二歳、小町は三十二歳

であったろうか。

つまり、小町の妖艶な盛りのある十九歳から三十二

歳にかけて、人康親王は出家の身であったらうと推察され

5465

る。

小町が、人康親王に恋心をいだき続けたとは考えにくい。更に、人康親王の「出家」・「薨去」共に夏五月であって、『秋』ではない。

□さて、淳和天皇の第四皇子『基良親王』は、天長六年(八二九)七月十日生まれなのだから、……小町よりも十

二歳とし上だったと思われる。

その姿は清秀であり、心は優しく誠実な方であった。

(三代実録)

基良親王は、承和十一年(八四四)に三品の位を授けられ、上総大守になられた。その後(いつか不明ながら)危篤状態に陥り、その直後のことであろうか、上表し、許されて入道とされた。そして、貞観十一年(八六九)の秋、九月二十一日に薨去されたという。(三代実録)

すなわち基良親王は、貞観十一年(八六九)の『秋』に、四十一歳で薨去されたのだった。

そしてこの時、小町は二十九歳であったように想察される。なるほど、断定は出来ないにせよ、(1)嵯峨天皇の第四皇子『基良親王』、(2)淳和天皇の第四皇子『基良親王』、(3)仁明天皇の第四皇子『人康親王』のうちから、小野小町の恋

869 29才
841 1
28 28

869 41
829 1
40 40

小町 貞観上124行
" " " 10行

小町 841
-829
12

前 貞観上103行

の相手「四のみこ」を選ぶとすれば、——淳和天皇の第四

皇子『基貞親王』であるように思われる。

桓武天皇の孫に当る『基貞親王』(やんごとなき四のみこ)に恋い焦がれて、小町は数多くの歌を詠んだのだろう。

四のみこ(淳和天皇の第四皇子『基貞親王』がお亡くな

りになったのは、……恐らく、貞観十一年(八六九)秋九月二十一日の『早朝』~~OT~~だったのであろう。

強い風が吹き荒れていた。

小町は歌った。

今朝よりは悲しき宮の秋風や

又あふこともあらしとおもへは

宮(四のみこ)がおかくれになって、今朝からは宮中の

其のお部屋が、空部屋となっていました。秋風が嵐の

ように吹いています。これからはもうお逢いすることも

あらし(あるまい)と思つと、悲しみて一杯でございます。

(小野小町論「黒岩痕香 朝報社、六七〜六八頁参照)

尚、「秋風」といえば、通常は、秋を「厭き」にかけて、

男女の心の変わることをいう。

しかし、この歌に関しては、二人の心が離れてしまった

ようには考えられない。

5466^A

同歌 5463^E

柳下

124

もつとも、小町の恋の相手である「四のみこ」は、嵯峨

天皇の第四皇子『基良親王』(夏六月十四日薨去)、あるいは

仁明天皇の第四皇子『人康親王』(夏五月五日薨去) ~~OT~~

であるうと考える人は、古来、多い。(小野小町「前田

善子、三省堂、二〇〇〜一頁参照)

そうした解釈をする者にとつては、——「秋風」はおか

しい、ということになる。

そこで、「秋風」を、「山風」や「吹風」に変えたものと

思われる。

*

ところで、この三年後の貞観十四年(八七二)夏五月五

日に、仁明天皇の第四皇子人康親王(「山科宮」と號され、

貞観元年夏五月七日に出家入道された皇子)が、四十二歳で

薨去される ~~OT~~

この折のことを、『当道要集』は

小野小町此宮の御事をもてはなされて、

いとおしみ深く思はれるにや、

けふきこしかなしの宮の山風に

亦あふ坂も嵐とおもふ

といふいたみの歌を奉られけるとかや。

此歌は小町の家集に有と承り候ひき。

と述べている。「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、四二頁

参照)

前頁下 12行

●隣接している山科と逢坂とを結びつけての歌なのだろう、

と解される。

●尚、「しの宮」に「四の宮」が、「あふ坂」に「逢坂」が

掛けられている。「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、六

八頁参照)

つまり、小町は三年前の歌とよく似た歌を作って奉った

といわれているのであろう。

こうしたこと等があって、後世、正保三年(一六四六)

版の流布本系『小町集』(歌仙家集本)に記載されている

歌、

今朝よりはかなしの宮の山風や

またあふ坂もあらしと思へは

が作られたように推察される。

小野貞樹が非業の死を遂げたばかりか、四のみこ『基貞

親王』にも先立たれてしまった小町の悲しみは、……察す

るにあまりある。

しかし、そんな小町の心も知らぬげに、時は足早に流れ

5.467P

花の色は 移りにけりな いたづらに

わが身よにふる ながめせしまに

物思いにふけり眺めているあいだに、花は長雨にうたれ

て散っていった。花の色も私の美しさも、もはや消え失せ

てしまったのだわ。(古今集)巻第二十二三。群書類従本

「小町集」。「小倉百人一首」)

*「いたづらに」は、第一・二句に掛かっているばかりで

なく、同時に第四・五句にも掛かっているのだろう。

(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、一八一〜一八七頁

参照)

そしてまた小町は、この世を去ってしまった恋しい人を

しので、長歌を作った。

「葦田鶴の雲井の中に交じりなば」

なごいひてうせたる人のあはれなるころ

久かたの空にたな引く うき雲の うける我身は つ

ゆ草の露の命も 未だ消えで 思ふことのみ まるこ

すげ……

というのが初めの句である。自分は、物思いのみ繁き此世

に未だ死にも得ず、侘しき月日を送っている、というので

ある。中ほどに、

恋も別れも 憂き事も 辛きも知れる 我身こそ 心に
しみて 袖の 浦の 干る時もなく 哀れなる……

そして終りには、

いつか恋しき 雲の上の 人に逢ひ見て 此世には 思
ふこと無き 身とは爲るべき

とある。

ここにいう「恋しき雲の上の人」とは、即ち小町の恋人

のことである。

小町は、恋しい人の後を追って死んで雲の上に登り、其

の人に逢うことが出来たならば、一切の思いも消えるのに、

と嘆くのであった。(群書類従本「小町集」。「小野小町論」

黒岩涙香、朝報社、三六、七七頁参照)

*

小町の悲しみは、いつまでも、癒えることなくうつ

と続いていった。

『新古今和歌集』巻八―八五〇に、こう記されている。

題知らず(但し、群書類従本『小町集』には、「見し人

のなくなりしころ」という題がある)

小野小町

あるはなくなきは数添ふ世の中に
あはれいづれの日まで嘆かん

5,468^P

〔生きている人は失せ、失せた人の数はどんどんふえるの

が世の中なのだ。それなのに、ああ、命のはかなさを、い

つの日まで嘆くことであらうか〕

なお、歌の背後には、自分もやがて「なき」側の一人に

なるといふ諦念が流れていて、この歌をいつの世にも通じ

る嘆きになっている。(「朝日新聞」平成十年二月二十六日、

〈折々のうた〉大岡信。「新古今和歌集」日本古典文学全集、小

学館、二六八頁参照)

在原業平

しかし、世の中には不思議なものである。

四のみにこに遠慮していた者達が、――いまや《小町の心

をとらえよう》と、次から次へ引きもきらずやってくるの

だった。

小町には、心をときめかさずに、おかない気高い気品と

ともに、……そこはかとなない愁を帯びて弱々しい、たとえ

てみれば、高貴な女性の病んだ美しさがあった。(「古今集」

仮名序参照)

おそらく、その風情が、時の風流な男達の心を魅了した

のである。

だが、小町は自分へ言い寄り人々をば一々に受け流し、

あ54867
あまのむら
1371=あ557<L

少しも隙間を与えなかつたようである。

小町は、こう歌った。

とますれば仇なる風に細々波の

靡くてふごと我れ靡けとや

(群書類従本「小町集」)

男を風にたとえ、我が身を波にたとえた歌である。

また、靡け靡けとばかりに言い寄る男が多いので、「と

ますれば」と云ったのである。

よほど度び度び色々の人から言い寄られたのであろう。

(「小野小町論」黒岩涙香、朝報社、一九二〇頁。「小野小町

遺跡」片桐洋一、笠間書院、一四三頁参照)

「絶世の美女小野小町の心を、誰か奪うことができるだろ

うか」

風流人を自認する男達は、我こそはその心を射とめてや

ろうとばかりに、競って小町の敏心を誘った。

しかし、皆が皆、涙を呑むばかりだった。

平城天皇の孫にあたる在原業平(八二五〜八八〇)も、

そうした男達の一人であった。

『伊勢物語』第二五段には、こう記されている。

むかし、をどこ有りけり。あはじともいばざりける女の、

さすがなりけるがもとに、いひやりける。

5.469P

127

男に、逢おうともいわず、……かといつて逢うまいとも

いわない女で、情ありげにも見える人のもとに、次の歌を

送った。

「露のおかれた笹の葉を押し分けて帰った朝の袖も濡れて

いた。けれども、思う人について逢うことさえできないで

空しく引き返し、わが家で泣き明かす夜の袖の方が、もつ

と濡れるものなのだなあ」

この歌は、『古今集』卷十三一六二によると、在原業

平が作ったものという。

美男で多感な性格であったといわれる在原業平は、この

日も小町に逢うことさえできず、すぐごとと家へ引き返し、

やるせない思いで泣き濡れたのであろう。

ところが小町は、こう歌って返答した。

みるめなきわが身をうらと知らねばや

離れなで海人の足たゆく来る

「漁をする人が、海松布の生えない浦だということを知ら

ないで、足を棒にしてしげしげと訪れる。私は人を見る目

(男を見よう、男に逢おうという気持)のないつれない女な

のに、あなたはまだつらいと思ひ知らないから、毎夜欠か

542
第4回 在原業平参照

5.470P

- カラー
- 左頁の上半分に、大きくはみ出して掲載下さい。



• ここが欠けな → ように、注意して下さい。

第542図 ^{ありはらのなりひら}在原業平 ^{ごとうは} (後鳥羽院三十六歌仙繪) ^{← 原本の右肩に、こう記されている。}

『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪 ^{おとがけ} 角川書店、昭和42年12月30日発行、45頁参照、128P

さず絶えることなく、足がだるくなるほど通っておいでに

なるのでしょか) (竹取物語・伊勢物語・大和物語) 日本

古典文学大系、岩波書店、二二八〜九頁。「古今和歌集」日本

古典文学全集、小学館、二五六頁。「日本史辞典」東京創元社

〈在原業平〉参照)

在原業平は、平城天皇の孫、阿保親王の五男として、天

長二年(八二五)に生まれ、翌年の天長三年(八二六)に

在原姓を賜って臣籍に降っている。その概略の経歴は、次

のとおりである。

嘉祥二年(八四九)正月七日

无位在原朝臣業平従五位下(続日本後紀)……………二十五歳

貞観四年(八六二)三月七日

従五位上(三代実録)……………三十八歳

卒(三代実録)……………五十六歳

すなわち、淳和天皇の第四皇子『基貞親王』が薨去され

た貞観十一年(八六九)に、在原業平は四十五歳だった。

そしてこの時、小町は二十九歳であつたらうと思われる。

もしかしたら先の歌は、貞観十一年以後あまり年を経な

い頃に作られた——在原業平の片思いの「恋歌」、および

小町の返歌だったのかも知れない。

869
29
28
28

5471P

なお、在原業平と小野小町とは、『伊勢物語』から想像

して、後世夫婦であつたかのようにも云われているが、定

かではないようである。(「小野小町」前田善子、三省堂、一

九四〜一九八頁。「日本史辞典」東京創元社〈在原業平〉参照)

「美男と美女とを配したい」

そうした人情(願望)から、いわば自然に生じた素材な

思いなのであろう。(「日本の歴史」③平安貴族、読売新聞社、

一三三頁参照)

ここに、

〈在原業平は、陽成天皇の元慶四年(八八〇)に卒した〉

ということが特筆される。

在原業平は、……後述するような《小町が最も輝いた

時》を知ることなく、没したように思われる。

HV 深草少将 (楊の端書)

深草少将が小野小町のもとに九十九夜通つたという悲恋

の伝説は、あまりにも有名である。

「百夜通つて下さい」

という小野小町のところへ、夜ごと夜ごと、四位の深草少

将は通ひつづけた。そして、牛車の榻(牛車の牛をはずし

改所
上末

おの生

1/8

という。 (「小野小町追跡」片桐洋一 笠間
 書院 一九九三年十一月五日改訂新版発行
 一〇三頁参照)
 * ともあれ
 13.5 AM (口説けると思ふのなら 試してみたらど
 うでしょうか)
 といつた返答だったのであろう。

さず絶えることなく、足がだるくなるほど通っておいでに

なるのでしようか」(竹取物語・伊勢物語・大和物語)日本

古典文学大系、岩波書店、二八〇九頁。「古今和歌集」日本

古典文学全集、小学館、二五六頁。「日本史辞典」東京創元社

〈在原業平〉参照)

在原業平は、平城天皇の孫、阿保親王の五男として、天

長二年(八二五)に生まれ、翌年の天長三年(八二六)に

在原姓を賜って臣籍に降っている。その概略の経歴は、次

のとおりである。

嘉祥二年(八四九)正月七日

无位在原朝臣業平従五位下(続日本後紀)……………二十五歳

貞観四年(八六二)三月七日

従五位上(三代実録)……………三十八歳

元慶四年(八八〇)五月廿八日

卒(三代実録)……………五十六歳

すなわち、淳和天皇の第四皇子『基貞親王』が薨去され

た貞観十一年(八六九)に、在原業平は四十五歳だった。

そしてこの時、小町は二十九歳であつたらうと思われる。

もしかしたら先の歌は、貞観十一年以後あまり年を経な

い頃に作られた——在原業平の片思いの「恋歌」、および

小町の返歌だったのかも知れない。

なお、在原業平と小野小町とは、『伊勢物語』から想像

して、後世夫婦であつたかのようにも云われているが、定

かではないようである。「小野小町」前田善子、三省堂、一

九四〇一九八頁。「日本史辞典」東京創元社〈在原業平〉参照)

「美男と美女とを配したい」

そうした人情(願望)から、いわば自然に生じた素朴な

思いなのであろう。「日本の歴史」③平安貴族、読売新聞社、

一三三頁参照)

*

ここに、

〈在原業平は、陽成天皇の元慶四年(八八〇)に卒した〉

ということが特筆される。

在原業平は、……後述するような《小町が最も輝いた

時》を知ることなく、没したように思われる。

深草少将(楊の端書)

深草少将が小野小町のもとに九十九夜通つたという悲恋

の伝説は、あまりにも有名である。

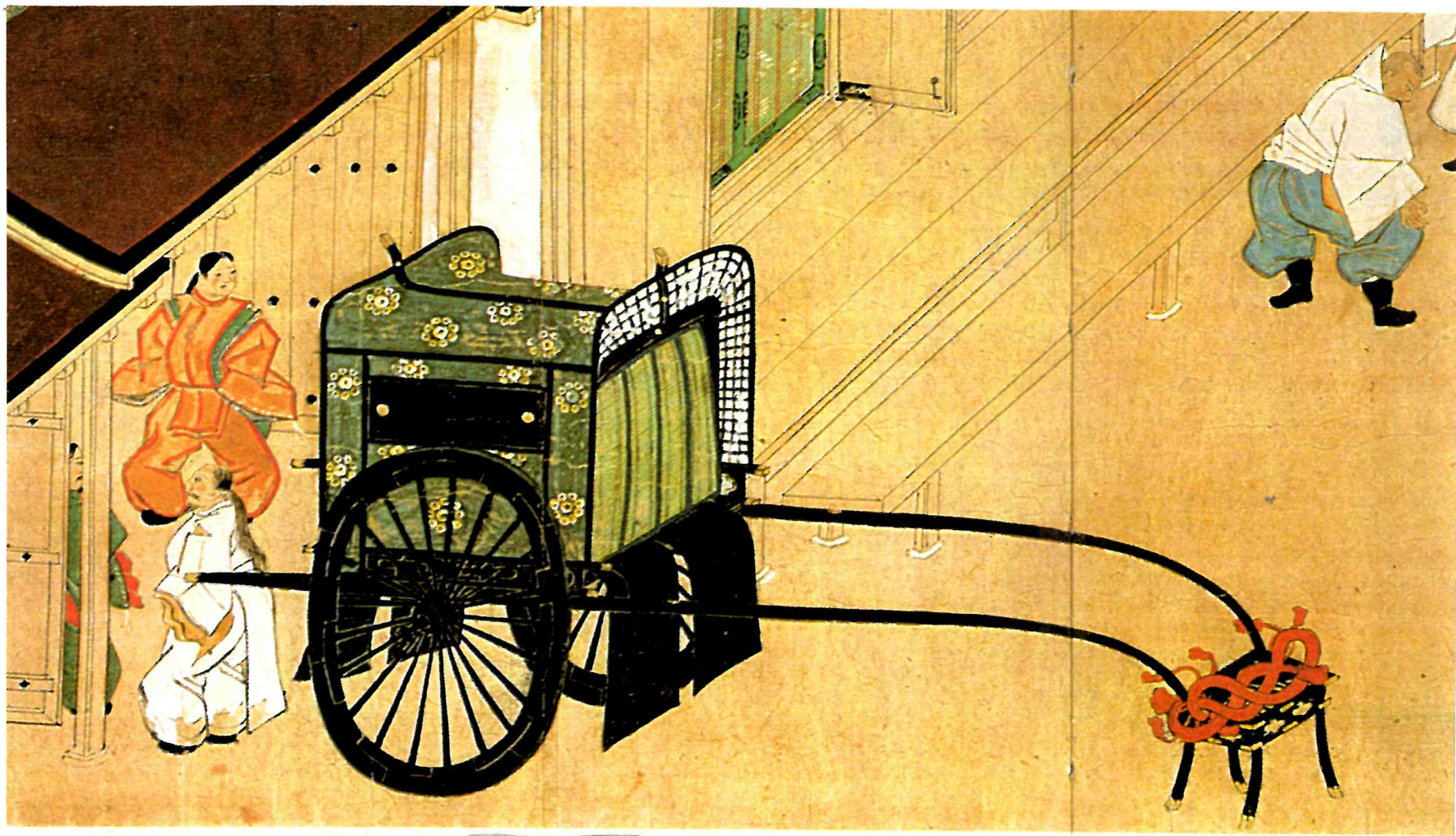
「百夜通つて下さい」

という小野小町のところへ、夜ごと夜ごと、四位の深草少

将は通ひつづけた。そして、牛車の榻(牛車の牛をはずし

5,474^p

5,476^p



第543 図 ^{なかえ} ^{くびき} ^{さし} ^し 轆の軛を支えている楊

川やまでらんぎ
『石山寺縁起』日本絵巻大成(18) 中央公論社 1989年7月25日(4版)発行 卷四参照
さきあし 黒漆塗りである
鷺足

るよしをいひければ、女、こころみむとて、来つづ物言ひける所に榻を立てて、「これが上に、頻りて百夜臥したらむ時、言はむことは聞かむ」といひければ、男、雨風をしのぎて、暮るれば来つづ臥せりけり。榻の端に寝る夜の数をかきけるを見れば、九十九夜になりけり。「明日よりは何事もえ否びたまはじ」など言ひて帰りにけるに、親の俄かにうせにければ、その夜、え行かずなりにけるに、女のみてやりける歌なり。

という。

つまり、男は百夜目に来られなかつたが、女は、その男の情に感じて、
「君が来ぬ夜は我ぞ数かく」と詠んだ、というのである。

もつとも、藤原清輔は、さらに続けて、
「これは、ある秘蔵の書に言へりと侍れど、確かに見えたることなし」と疑っている。

しかしながら、この当時、無視出来ないほど有力な説となつたようである。「小野小町遺跡」片桐洋一、笠間書院 一三九〜一四二頁参照）

*

5.477P

そして、以下に述べるような多種多様の見解がある。

■平安中期の長保二年（一〇〇〇）頃の作とされる『枕草子』二八六段の

「今宵のほども、少将にやなりはべらむとすらむ」

〔今晚のうちにも、あの少将のようになってしまうのでは
ないか、という気がいたします〕

は、――疑点があるにしろ、深草少将のことを暗示しているのだから、と言われている。「小町伝説」明川忠夫、現代

創造社、四四頁参照）

なお、『春曙抄』に、この言葉に関して、
「百夜かよ」といひし女のもとへ九十九夜ゆきて、今夜一
夜を待あへずしてうせたりし深草の少将の世がたりにてい
る詞にや。清少も早く参たき心いられに、今夜一夜を待か
ねてうせやし侍らんとなるべし」

とある。「枕草子」(石田穰二訳注、角川文庫、一五四、二
四四、四〇〇頁参照)

●また因みに述べると、『枕草子』一六六段には、
「君達は、頭の中將。頭の弁。権の中將。四位の少將。蔵
人の弁。四位の侍従。蔵人の少納言。蔵人の兵衛佐」

とある。

清少納言は、当時かなり著名で、女達のあこがれの的
で

あった『君達』(諸王や撰家などの高貴な家の子息)を、……

名で記さず、官位でもって羅列したのではなからうか。

この時代の人々は、恐らくそれだけで、誰のことを述べ

ているのか理解したのであるうと推察される。

ここに、『四位の少将』と記されている。

あるいは、清少納言は、

小町のもとに九十九夜通いつめたという『四位の深草少将』

等こそ、君達のなかでも最も君達と呼ぶにふさわしい

と考えていたのかも知れない。

■『伊勢物語』は、ある男の歌(実是在原業平の歌)とし

て、

秋の野に笹わけし朝の袖よりも

逢はでぬる夜ぞひちまさりける

を載せ、この歌に対する女の返歌(実是小野小町の歌)と

して、

みるめなきわが身をうらと知らねばや

離れなで海人の足たゆく来る

を載せている。(第九十五章<在原業平>の項において既述)

小町にこのような歌があるので、深草少将の百夜通いの

説話が生まれたのだろうか、ともいう。(『古今和歌集』日

本古典文学全集、小学館、二五六頁参照)

5469下
5469' F159

5,478P

■小野小町のもとに九十九夜通ったという悲恋の人物「深

草少将」は、僧正遍昭また大納言義平の子義宣を種とした

ものなのではなからうか、ともいわれている。(『広辞苑』

<深草少将>参照)

①「少将」から想像して、「良少将」と呼ばれた良岑宗貞

つまり後の僧正遍昭を「深草少将」とするのは、本居内遠

である。(小野小町の考)。「小野小町追跡」片桐洋一、笠間

書院、一三七頁参照)

②『後松日記』の第十卷に、

「深草の少将、名は義宣、大納言義平の長子なり、弘仁三

年(八二二)三月十二日卒すの由、深草欣浄寺の説」

とあるという。(「小野小町論」黒岩涙香、朝報社、四五頁参

照)

すなわち、嵯峨天皇の弘仁三年(八二二)に卒した義宣

は、「深草の少将」と呼ばれていたという。

■「深草」から連想して、「深草の帝」と呼ばれた仁明天

皇を「深草少将」とするのは、黒岩涙香である。(「小野小

町論」黒岩涙香、朝報社、五二〜五六頁。「小野小町追跡」片

桐洋一、笠間書院、一三七頁参照)

なお、『深草』は、京都市伏見区北部の地名である。

「広辞苑」<深草>参照)

また、往時の山城国紀伊郡深草郷に「深草陵」があって、

この山陵が仁明天皇の御陵であるという。(「帝國地名辞典」

太田爲三郎、名著出版〈深草〉参照)

とはいえ、『通小町』の舞台となっている平安京北郊の

「市原野」に、『深草』という地名は無い。「小町伝説」明

川忠夫、現代創造社、四四頁参照)

ともあれ、このような数数の説があって、まるで雲を纏

むように判然としない。

そして、この伝説のもとになった『深草少将』という人

物が、実在したのかそうでないのかさえ、全く詳らかで

ない。

いうまでもなく、立証することは甚だ困難ながら、この

物語ではあえて、

〈四のみこ『基貞親王』がお亡くなりになった貞観十一年

(八六九)秋九月二十一日以後のその当時——『四位の

深草少将』と呼ばれた人物が実在したのであろう。

と解してみたい。

■なるほど真香のほどは分らない。

しかし、もしも小野小町が承和八年(八四一)に生まれ

たとすると、……『仁明天皇』(深草帝)や『遍昭』が、

『深草少将』であった筈はあるまいと想到される。

『仁明天皇』(深草帝)は嘉祥三年(八五〇)三月二十

一日に崩御され、『遍昭』は同年同月の三月二十八日に

家したのだった。

その時、小野小町は、わずか十歳であったらうと思

われるからである。

■もしかしたら、『深草少将』とは、『深草帝の子である少

将』という意味なのではないだろうか。……『深草帝の子

少将』をすこし縮めて、『深草少将』と呼ぶことは充分あ

り得たように思われる。

参考文献に述べると、在原業平の次男滋春は、『在次の君』

と呼ばれた。(古今和歌集「日本古典文学全集、小学館、五

〇〇頁参照)

そして、清原元輔が少納言であったから、『枕草子』の

作者(本名不詳)は『清少納言』と呼ばれたのだった。(広

辞苑「清少納言」参照)

この当時、父を基点とした呼び名で称したり、父の名や

官職の一部をとって通称としてたりすることは、珍しくなかつ

たのであろう。

* **官位**について

あらかじめ述べておきたいことがある。それは

5,479^p

位階については

①『日本書紀』(4)日本古典文学大系、岩波書店、六二頁、表十一の「冠位・位階制の変遷」には、——『品』(親王

にたまわった位)と、『位階』との関係について、

「一品は正一位・従一位に相当し、二品は正二位・従二位に相当し、三品は正三位・従三位に相当する。そして四品

は、正四位上・正四位下に相当する」

ということが示されている。

つまり、概略、一品は一位、二品は二位、三品は三位、

四品は四位に相当するといえよう。

②そして、『広辞苑』〈四品〉の項に、

「(四品は)四位の異称である」

と記されている。

③先にふれたが、——謡曲『通小町』には〈四位の少将〉

とあり、『枕草子』一六六段にも〈四位の少将〉とある。

『枕草子』(下巻)石田穰二訳注、角川文庫、五九頁注二

六、一九九頁補注九一には、「四位の少将」について、次

のように解説されている。

「少将の相当は正五位下で、五位の殿上人中、譜代の君達

から選ばれる。四位に進めばその職(少将としての職)を

辞するのが普通であるが、特別の恩賞の意味で原職に留ま

5,480P

る場合がある。名譽なこととされていた

という。(同様の例「三位の中将」参照)

*

■それでは、『深草帝』(仁明天皇)の皇子達のうち、誰が

『四位の深草少将』その人と考えて妥当だといえようか。

①まず、仁明天皇の第一皇子『文徳天皇』(八五〇年即位)

ではあるまいと考えられる。

②仁明天皇の第二皇子『時康親王』(後の光孝天皇)の位

でもあるまい。

●『三代実録』貞観十一年九月十日条に、

「中務卿三品兼行大宰帥藤原親王抗表」

●『三代実録』貞観十五年正月十三日条に、

「三品行中務卿藤原親王爲「上野太守」

とある。

すなわち、時康親王は、四のみこ『基貞親王』が薨去さ

れた貞観十一年(八六九)九月二十一日当時すでに三品

(正三位・従三位相当)であった。

③仁明天皇の第四皇子『人康親王』のごときもあるまい。

先に述べたように、人康親王は、貞観元年(八五九)五

月七日出家入道されたという。

④仁明天皇の第七皇子『常康親王』は、嘉祥四年(八五二)

二月出家して雲林院にこもり、貞観十一年(八六九)五

月十四日に薨去されたという。(古今和歌集)日本古典文学

全集、小学館、五〇二頁〈雲林院の親王〉(参照)

⑤仁明天皇の第十五皇子『貞登親王』は、貞観九年(八六

七)従五位下。寛平六年(八九四)正五位下であったとい

い、この時まで四位に至っていない。(古今和歌集)日本

古典文学全集、小学館、五〇四頁〈貞登〉(参照)

■仁明天皇の多くの皇子の中から、『四位の深草少将』と

呼ばれた可能性のある親王を選び出すのは難かしいが、こ

こに依りに、

『四位の深草少将』は、仁明天皇の第五皇子『本康親王』

のことである。

と考えてみたい。(古今和歌集)日本古典文学全集、小学館、

五一頁〈系図〉。「国書人名辞典」岩波書店〈本康親王〉(参照)

『三代実録』は、『本康親王』の官位について、大略次の

ように述べている。

●貞観二年二月十四日。……四品行上総太守本康親王、

爲「彈正伊」上総太守如「故」。

●貞観五年二月十日。……四品彈正伊本康親王、爲「兵

部卿」。

●貞観五年二月十四日。……四品兵部卿兼上総太守本康親

5,481P

王。

●貞観十一年二月十六日。…四品守兵部卿本康親王、爲「

上総太守」。兵部卿如「故」。

●貞観十三年正月七日。……授「四品行兵部卿兼上総太

守本康親王」三品。

●貞観十八年十二月二十六日。……二品行兵部卿本康親

王、爲「大宰帥」。兵部卿如「故」。

つまり、本康親王は、貞観年間前半の長い年月にわたっ

て、『四品』(四位相当)の位にあったことが分かる。

* 本康親王(四位の深草少将)は、貞観十三年(八七一)

正月七日の任官の儀の爲、ずい分早くに、上総国を出立し

たことであつたろうか。

因みに述べる、この当時、上総国(千葉県中央部

一帯の国)の『市原郡』(和名抄に伊知波良とある)に、国

府が置かれていた。千葉市の南約八ギ、東京湾に面した所

である。

そして、上総国市原郡内には、『市原』という村もある。

(帝国地名辞典)太田爲三郎、名著出版〈市原郡・市原〉。「和

名類聚抄卿名考證」池辺彌、吉川弘文館〈市原郡〉(参照)

*

基貞親王(869) 貞観十一年(869)

5474 下未

少将の相者は正五位下
5480 上未

観十二年(八七〇)の九月末以前、~~都~~都に到着していた。
上総国の市原野辺を後にした『四位の深草少将』は、貞木々の色が染まってゆくそんなある日のこと、四位の少将は、絶世の美女を目にした。
その女人は、小野小町だった。

このとき小町は、あるいは三十歳であったろうか。まさに艶やかで円熟したなまめかしさを漂わせていた。
少将は、一目見た小町のおまりの美しさに息をのみ、一瞬にして、その美貌のとりことなってしまった。

早速にもその夜、『深草帝の子少将』は、……高貴極まらない血筋の故に誰にも咎められることなく、宮中の小町の居処へと牛車を進ませ、訪ねていった。
またまたお越しになった新たな殿方に、小町はたわむれにこう言った。

「百夜の間、一日も欠かすことなくお通いになったならば、私のかたくなな心も変わるかも知れませんね」
さあ、その言葉を真に受けた少将は、気もそぞろに夜毎小町のもとへと通い続けた。

少将は、牛車の櫓(牛車の牛をはずした時、轆の軛を支え、また乗り降りの踏み合として用いる黒漆塗りの具)に印をうつ

5,482 P

けて、その度数を記し、九十九夜まで通いつめた。

いよいよ、次の日こそ、——はからずも任官の日、つまり貞観十三年(八七一)正月七日だったのではなかるうか。

その日は、朝から雪が舞っていた。

少将は嬉しくてならなかった。

「今夜は急いで行こう。姿は如何に、風折烏帽子に花摺衣の色囊、裏紫の藤袴……ああ、わくわくする待ち遠しさよ」
(謡曲「通小町」より一部抜粋)

しかし、その日、朝廷を早く退出することが出来なかつ

『三代実録』貞観十三年正月七日条に、こう記されている。

「(清和)天皇御紫宸殿。覽青馬。賜宴群臣。内教坊奏女楽ヲ。宴賜祿各有差。

恒親王四品。参議従四位上行大宰大貳藤原朝臣冬緒正四位

とある。

任官の儀式は短時間のうちに終ったにせよ、女樂が奏されるなど、かなり盛大な宴が設けられたのであろう。

(続日本紀「淳仁天皇天平宝字七年正月十七日条〈内教坊〉参

大宮人らの華やいだ宴は、いつ果てるとも知れず打ち続

いていったように想像される。

*

日が暮れて、賑やかな『飲酒』の席は、いよいよ酔となっ

た。(謡曲『通小町』参照)

「何を浮かぬ顔をしておるのだ。そなたにとって、今日は何よりの目出度い日ではないか。ささ、この酒をば飲み干

すがよい」

こうして後、やと『飲酒』の宴饗から解放された時

深草少将の足はすでにおぼつかなくなっていた。物み

な全てが、フワフワと動いているように見えた。

「急いで行かなければ……」

小町が居処としていているところは宮城内にあって、それほ

ど遠くに離れてはいなかったらうと思われる。

「えいえい、牛車を呼ぶのもどかしい。……うむ、歩い

て行こうぞ」

三品となつた本康親王(以下、これまで通りに少将と呼ぶ

ことにしたい)は、……いま、大雪の中を、必死になつて

歩いていた。

しかし、心があせるほどには、少将の足は前に進まなかつ

た。

5483P

なお、蛇足ながら、

「あお目がまわる」

いよいよ激しい酔いがまわってきた少将は、もはや歩き

つづけることも出来ず、雪の中に倒れ伏した。

少将は、哀れ、恋を果たせなかつた。

三品本康親王は、うしろ髪引かれる思いで、——上総国

の『市原野辺』へと帰っていったのだらう。

■もつとも、『三代実録』の貞観十三年正月七日条に、「雪」

が降つたという記事は無い。

また、謡曲『通小町』に、この日、大雪が降つたと記さ

れているわけではない。

ただし、謡曲『通小町』には、百夜目の少将の様子につ

いて、

「急ぎて行かん。姿は如何に。笠も見苦し、風折烏帽子。

篋をも脱ぎ捨て、花摺衣の、色襲。裏紫の、藤袴。云々」

とある。

すなわち、

〈少将は、笠や篋を脱ぎ捨てて、小町のもとへ急いだ〉

という。

雪が降つていたと解釈しても、おかしくないように思わ

れる。

「笠や簀を身につけた姿では見苦しいので、これらを脱ぎ

捨てて小町の居処へ急いだ」

というのだから、――雨が降っていたとは考えにくい。

■さらに述べると、謡曲『通小町』の末尾近くに、

「飲酒は如何に。月の盃なりとて、戒めならば保たんと、

唯一念の悟りにて、云々」

とある。

上弦の月(半月)である『七日の月』のことを、...

「雲に隠れていて見えなかったであろうがあえて詩的に、

『月の盃』と称したのではなからうか、などと想像される。

因みに述べると、

①『上弦の月』について、

「新月から満月に至る間の半月。日没時に南中し、真夜中

に弦(平らな部分)を上にして月の入となる。太陰曆で毎

月七日・八日頃に当る」

と説示されている。(『広辞苑』<上弦>。「天体・気象」原色

学習ノイド図鑑、学研、三五頁参照)

②また、『月の盃』について、

「月を盃に見たてていう語である」

という。(『広辞苑』<月の盃>参照)

<深草少将は、百夜目の貞観十三年(八七一)正月七日に、

5.484 P

『飲酒』によって恋を果たすことが出来なかった

と解しても、あなたがち不自然ではないように思われる。

*

先述のように、「百夜通ひ」の真相は分からないが、

――謡曲『通小町』は、ともあれそういった伝説を背景と

して作られたのである。

古曲を観阿弥清次が改作し、そのち世阿弥元清が更に

改作したものである。

では、謡曲『通小町』の概略の構想について述べておく

ことにしよう。

深草少将の愛欲は熱烈を極めた。

しかし、深草少将は、才色を自負する小町に弄ばれ、世

にも気の毒な死に方をした。小町のもとに九十九夜通ひ、

百夜目に倒れて、死んだのだった。

その後、小町も死んだ。

ところが少将は、小町を平安京北郊の『市原野辺』に留

めて、小町を成仏させようとしな

さて、市原近傍(市原の東約五き)の八瀬の山里で一夏

を送っている僧のもとへ、小町は里女の姿で毎日木の实や

薪を持って来る。回向を受けて成仏したいからである。

僧が女の素性を問うと、女は、

PSYA 13.5

恥かしや己が名を小野とは言はじ
薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ
と答え、回向を乞うて消え失せた。

この女を小町の幽霊と察した僧が、市原野辺に行つて回
向をしていると、女が再び現われて授戒を乞うた。

するとそこへ、ふいに一人の男が現われ、こう言った。
「いやふまじ、戒授け給はばうらみ申すべし。はや帰り

給へお僧」
そして男は更に、

「二人居るのも悲しいのに、私を唯一人取り残して成仏し
ようというのか」

と言ひ、女を引き留めた。
その男女が少将と小町の亡霊であるのを知つた僧は、

二人共に成仏させようとして、
「懺悔の爲に百夜通ひの有様を示されよ」

と言つた。
この勧めに従つて、少将の亡霊はその時の事を物語つた。

さらに、小町が諭した飲酒の戒めを悟つたことが一念発起
の基となつて、兩人共に成仏したといふのである。(謡曲

「通小町」観世左近、檜書店〈解説〉参照)
*
5.485P
05861P
124

なお、謡曲『通小町』には、最高に盛り上がるべき「百
夜通ひ」の百夜目の情景、および小町と少将の成仏につい
て、一次のように記されている。

かやうに心を盡し盡して榻の数々よみて見たれば、九十
九夜なり。今は一夜よ、嬉しやとて、待つ日になりぬ。

急ぎて行かん。姿は如何に。笠も見苦し、風折烏帽子。
蓑をも脱ぎ捨て、花摺衣の、色襲。裏紫の、藤袴。待つ

らんものを。あら忙がしや。すは、はや今日もくれなる
の狩衣の、衣紋(えりもと)けだかく引きつくるひ。

飲酒は如何に。月の盃なりとて、戒めならば保たんと、
唯一念の悟りにて、多くの罪を滅して、小野の小町も少

将も、共に佛道成りにけり。共に佛道成りにけり。
とある。

まるで幽霊の足のようにならうやむやで、何だかよく分から
ない終幕である。

いや、酒に酔い潰れたかのように朦朧としている、とい
うべきなのかも知れない。

そこで、
「最後に小町と共に少将も佛道成就するといふ結末は、不
自然であるけれども、能の舞台操作の常套手法と見ればあ

まり多く論ずるにも及ぶまい」

という。(「通小町」観世左近、檜書店〈曲趣〉の末尾参照)

なるほど、謡曲『通小町』の最終部分は、あまりにも省略

略されていて、

〈現代の我々には、到底納得し難い結着のしかたである〉

といえよう。

しかし、もしかしたら、

〈謡曲『通小町』の原型となった演劇が作られた頃の人々

は、……末尾が不鮮明であろうとも、その詳細を熟知して

いたので、充分理解することが出来たのではなからうか〉

と想像される。

* 。

それにしても、

①どんなわけがあって、深草少将の亡霊が、小町の亡霊を

平安京北郊の『市原野辺』に引き留めていた、というのだ

らうか。

つまり、謡曲『通小町』では、何故その舞台を、――

上総国の国府の地『市原』でなくて、『平安京北郊の『市原』

に設定したのであるうか。

②また、一体どうして、深草少将や小町の亡霊が平安京北

郊の『市原野辺』に居たという舞台設定に、当時の人々が

納得していたのだろうか、

12.50M

5.486P

老ね 極まりない

と疑問に思われる。

だが、こうしたことについて、いまここでこまごまと書

けば非情に煩雑になるので 第九十六章〈世にも恐ろしい

形相の大男〉の項において思うところを述べたい。

*

『四位の深草少将』の一途な恋さえも実らなかつた。

その百夜通いの噂は広まり、更に多くの男達が、徒(空)

なる風に吹き寄せられでもしたかのよう小町のもとへ集

まってきた。(「広辞苑」〈徒・空〉参照)

小町は、こども歌った。(「古今集」卷十四一七二七。群書

類従本「小町集」)

海人のすむ里のしるべにあらなくに

うらみむとのみ人の言ふらむ

私は漁師の里の案内人ではないのに、どうして人は「浦

見む」(恨みむ)とばかり言うのでしよう。

美しさに眩惑された数多の男達が、次から次へ言い寄

たが、……小町の心を動かすことは、どうしても、誰にも

出来なかつた。

すぐごとと引きさがつた男達は、皆が皆、小町が悪いわ

けでもないのに、なぜかしら小町を恨みにのみ思った、と

いう状況が歌われているのであろう。